

報告番号

※ 第 号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

諏訪大社御柱祭の文化人類学的研究
—祭礼の存続と民間信仰—

氏 名

石川 俊介

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、フィールドワーク調査を基にした、長野県諏訪大社御柱祭（通称御柱祭）の文化人類学的（民俗誌的）研究である。

本論の目的と視座

本論の目的は、祭礼という文化事象の「存続」と、参加者（当事者）の「民間信仰」という視座から、祭礼を論じることである。

日本国内の祭礼研究は、柳田國男の『日本の祭り』を嚆矢として、儀礼研究のひとつとして発展してきた。その手法は、文化人類学者や宗教学者による過程分析と、社会学者による社会統合論に大きく分類されていたが、1980年代以降は記号論やライフヒストリー研究など、新たな手法を取り入れた研究が行われるようになった。

本論もこれらの研究に順ずるものであるが、祭礼を日常から離れた特別な事象と見るのでなく、準備、会合、練習のような「日常の出来事」からこそ論じるべきだと考える。なぜなら、まず第一に祭礼は社会の一部であり、常に社会からの影響（社会的要請）を受けながら行われているものだからである。また、祭礼は例年祭のように一定の周期で繰り返される行事である。前回と次回の間の期間に、前回の問題点が洗い出され、当事者間で話し合いや調整が行われる。その結果が次回に反映されるのである。すなわち、祭礼本番で行われることは、その意味付けも含め、全てこの期間に決まっているのである。本番ではそれを遂行するのみである。このような視座を持つことで、祭礼という文化事象は、「日常」における当事者たちの活動から生み出されるものであることがわかる。

本論では、祭礼に対するもうひとつの視座として、「民間信仰」を探り上げる。祭礼

を含む宗教行事には、当事者間における共通認識（コード）がある。これは、五穀豊穣、疫病祓い、先祖供養など行事の直接的目的に関する認識である。対して、民間信仰とは当事者個人や集団によって、共通認識の上に創り出された独自の信仰である。これらには多くのバリエーションがあり、直接的な目的から逸脱する可能性を持ったものである。しかし、民間信仰はその自由さ故に当事者が祭礼に参加する動機となっていると考えられる。当事者は祭礼に独自の意味を見出し、各々の希望をかなえるための行為を行っているのである。

本論の内容

まず、序論においては、フィールドワークの成果から、御柱祭の内容について論じる。特に準備期間における行事について詳述する。また、筆者が氏子として参加した氏子組織の視点から、準備と本番だけでなく、後の行事までを見ていく。御柱祭は6年に1度しか行われない式年祭である。また、諏訪大社の上社と下社それぞれで行われる大規模な祭礼である。よって、長期的フィールドワークが難しいとされてきたが、筆者は1年半の居住期間を含めて、約10年間の調査を行った。

第1部 御柱祭の「存続」をめぐって

第1部では御柱祭の存続について、御柱用材の調達問題と、「暴力」をめぐる歴史と言説から論じる。

1章 「伝統」をつなぐ「実践」と新たな行事の創出

祭礼が行われるためには、必要な「モノ」が準備されなければならない。それが祭礼の目的に関わるものであり、宗教的に重要であればあるほど、準備も重要になる。準備のプロセス自体が「伝統化」している場合もある。御柱祭は、社殿とともに巨大な御柱を新調する祭りであるが、御柱は宗教的にも「伝統的」も妥当な過程を経て調達されなければならない。しかし、御柱となる巨木は容易に調達できるものではない。調達が難しい昨今、諏訪大社は調達場所を変えることで対応してきた。それに対応して調達に関する行事（儀礼）も変更されることになった。また、メディアを通して、変えることに対する説明を行ってきた。このような実践により、宗教的・「伝統的」な妥当性が維持されるのである。存続問題は祭礼の危機とも考えられるが、創造性が發揮されるきっかけにもなる。氏子たちが新しい行事を発案したり、新しい当事者が加わったりするなど、祭礼に新規性が加わることもある。

2章 「ネガティブ」なことに対応する—「暴力」から見る御柱祭

「暴力」も祭礼の存続については常に問題となる事象である。喧嘩（暴行）や破壊

行為（器物破損）は、日常では忌避され処罰の対象となる行為であるが、祭礼という状況においては黙認されることがある。「暴力的行為」が意味のある行為として、祭礼の中で積極的に行われることさえもある。喧嘩や破壊行為は、山車や神輿の競争、ぶつけ合い等の中で起こる副次的な事象である。それらは当事者の関心事であるだけでなく、見物人を集める「見せ物」や「呼び物」となっている。

しかし、「暴力的行為」に対する社会の見方は、明治維新を契機として大きく変わったと言える。上社の御柱祭においては、明治20年代に多くの死傷者を出す喧嘩や乱闘が頻発したため、警察の本格的な介入が行われるようになった。また、一部の村々からは参加拒否が表明されるなど、奉仕体制の根本を揺るがす事態となった。「暴力的行為」の温床とされていた、御柱の「追い抜き競争」も取り締まりの対象となり、昭和30年代までには姿を消すことになった。「暴力的行為」への評価をめぐって、御柱祭も変化を経験してきたのである。

しかしながら、御柱祭における「暴力的行為」が完全に過去のものとなったわけではない。現在の御柱祭では、喧嘩や乱闘についてほとんど聞かれることがない。御柱祭の「暴力的行為」は、坂から御柱を落とす木落しなどの「危険行為」に集約されている。時に死傷者を出すこともある行事であるが、その危険さゆえに注目を集めている。死傷者の存在はかつての「暴力的行為」と同様に、御柱祭の存在意義を否定する可能性を持つ。それにもかかわらず、当事者間では死傷者に関するうわさが飛び交っている。彼らは筆者のような研究者に対しても、「実際はもっと死んだ人がいる」などと語る。彼らが語るこのような死傷者の「話」は、御柱祭の価値を主張する言説となっていると考えられる。筆者のような「部外者」には、御柱祭の「すごさ」を伝える表象行為であり、当事者間では「すごさ」を確認し、互いに充足するためのコミュニケーションとなっていると考えられる。このような言説によって、御柱祭の存続にとって不都合な死傷者の存在を「話」の位相に封じ込めながらも、うわさという「物語」を駆使して御柱祭の価値を主張していると考えられる。

第2部 「民間信仰」から見る御柱祭

第2部では当事者が御柱祭において生み出す「民間信仰」について論じる。それらの「土台」となる共通認識を生み出す木遣り唄について論じた後、御柱そのもの（「モノ」としての御柱）と下社木落しを事例とし、御柱祭における「氏子の信仰」を論じる。

3章 木遣り唄から見る御柱祭

御柱祭で唄われる木遣り唄は諏訪地域の民謡であり、様々な場面で唄われている。その一番の特徴は、仕事歌としての性格が強いことである。木遣り唄は、曳行中の氏

子たちの調子を合わせるものとして、実質的に機能している。また、氏子たちの信仰面を支えるものである。木遣り唄の歌詞には、「山の神」に関するものがあり、重要な場面で唄われる。山の神は、曳き出しの際に御柱に乗り、御柱が建てられると山に帰っていく。木遣り唄によってこの世界観が作り出されている。木遣り唄は、御柱が「ご神木」、あるいは「神そのもの」であるという氏子たちの共通認識において、非常に重要なものである。

4章 「御柱そのもの」への信仰

木遣り唄にあるように、御柱そのものにも「聖性」があると氏子たちは考えている。それは御柱自体だけでなく、その破片（木片）や、前回以前に建てられ役目を終えた古い御柱（古御柱）にもあるとされる。氏子たちは御柱を加工する際に出る木片を持ち帰り、お守りや置物等に加工する。古御柱は多様な払い下げ先に渡り、新たな人生を歩む。古御柱に対する意味づけや利活用の方法は様々である。本物の御柱であったことを担保としながら、観光用展示物、記念木、故郷を表象するモニュメントなどに利活用されている。このような御柱の「副産物」の扱われ方からも「氏子の信仰」を見ることができる。

5章 木落しの歴史と現状ー「風流行事」を考える

現在の御柱祭のハイライトと言われるのは、下社御柱祭で行われる下社木落しである。氏子を乗せた巨大な御柱が急坂を滑り落ちる姿は、多くの見物人を魅了する。「伝統的」行事に見える木落しであるが、明治以前にさかのぼるものではない。木落しは、御柱を曳行路上の坂から落すという「作業」であったとされる。しかし、大正時代にひとりの氏子が御柱に乗り下った。これが「度胸試し」や「余興」としてもてはやされるようになり、御柱に乗り下ろうとする若者が増えていった。昭和30年代には「木落し乗り」が全ての御柱で見られるようになった。さらには、先頭に乗る「先頭乗り」が名誉役となり、「先頭乗り」を誰が務めるかということが氏子たちの関心事となつた。「度胸試し」や「余興」の域を脱し、「御柱祭＝下社木落し」とまで言われるほどの行事に発展した。

この発展には、地元新聞やテレビ局が大きく関与したと考えられる。それに呼応して、氏子たちも木落しを儀礼や神事のような形式のある行事とみなすようになった。木落しづかたりに注目が集まることに懸念を示す氏子がいることは事実だが、木落しを重要な行事と考えない氏子はいない。下社木落しは、人が巨木とともに急坂を下るという見た目のスペクタクル性だけでなく、御柱の「聖性」が現れる行事である。氏子たちは木落しという経験を通して、「ご神木」である御柱と交流するのである。このように木落しは一種の「宗教体験」として捉えられている。御柱を更新するという目的

からすると、木落しはまったく意味のないものである。しかし、現在の御柱祭においては、下社木落しが祭礼としての御柱祭の中心となっている。御柱祭の理念やイメージを集約した行事であるとも言える。

全体の総括と結論

本論は、御柱祭を事例として、祭礼がどのように行われているのか、参加者は祭礼から何を得ようとするのかを考えるものであった。

祭礼を含め、民俗行事や芸能の存続については多くの研究蓄積がある。それらの多くは扱い手不足（人的資源）の問題から存続を論じるものである。本論は、物的資源の問題と、「暴力」という問題から存続について論じた。物的資源の問題については、儀礼実践と言説という事例から論じた。「暴力」については、歴史変遷と言説を事例とした。

民間信仰については、これまで祭礼研究で指摘されてきたものである。本論では、御柱（祭）に対する氏子の信仰について論じた。御柱は造営される社殿の一部であり、それ自体への意味付けはあいまいである。諏訪大社の神事においては、「神」が宿る「ご神木」として扱われることはない。しかし、木遣り唄によって御柱の「聖性」が生み出され、それを「土台」として氏子の信仰が展開していると考えられる。御柱祭は神道祭である。その文脈に依拠しながらも、時に逸脱するものとして御柱の「聖性」が見出されるのである。このような民間信仰は、祭礼への参加動機として重要である。氏子は御柱祭に奉仕するだけでなく、自分自身も何かしらの「利益」を得ようとするものである。木片や古御柱を求める人たちや、木落し乗りに熱中する人々は、御柱という媒介によって、自身の願いを達成しようとしているのである。

本論によって、祭礼とは、常に続けられるかどうかわからないものであること、参加者の自由な信仰（発想）によって支えられているものであることが明らかになった。すなわち、本論は、御柱祭と言う祭礼を成り立たせているものを記述する民俗誌的研究であったと言える。存続の問題と民間信仰という視座は、祭礼研究以外の研究にも応用できるものである。本論で得られた成果を基に、引き続き「伝統的行事」についての研究を進めていきたい。